

美術の窓(167)

広重は東海道を旅した後に 『東海道五拾三次』を描いたか？

大和文華館館長 浅野秀剛

2023年は、今年の7月にあべのハルカス美術館で開催される『あべのハルカス美術館10周年記念 広重一摺の極』(7月6日～9月1日)の原稿ばかり書いていたので、前号に続いて広重の話になることをご容赦いただきたい。

東海道を描いた数多い広重作品の中で最も早くに成立し、爆発的に売れ、広重の名声を確立したシリーズが保永堂版『東海道五拾三次』である。私を含め、広重研究者の近年最大の関心は、広重が、保永堂版『東海道』を描く前に東海道を旅したかどうかということであろう。20年ほど前までは、広重が、天保3年(1832)に幕府の八朔御馬進献の式に随行し、その道中のスケッチをもとに版下絵を制作、天保3年後半に作画を開始して天保5年春には完成したと考えられてきた。ところが鈴木重三先生(私の浮世絵の師なので敬称を付けさせていただく)から疑義が出され、その新説を大筋で受容する研究者が増えてきたと感じるからである。新説は、天保3年の広重の旅に疑問を呈し、作画開始を天保5年春頃、完成を天保6年末から7年春とするもので、鈴木重三・木村八重子・大久保純一『保永堂版 広重 東海道五拾三次』(岩波書店、2004年)に詳しく論じられている。新説は、旅をしたかに加えて、作画開始を1年余、完成を2年遅らせたのである。作画開始が天保5年春頃となれば、天保5年春頃に刊行を終えた北斎の『富嶽三十六景』とは刊行年が重ならず、北斎→広重という図式になってしまう。それも我々にとっては重

大事なのである。

広重の旅は、「天保の初年、広重幕府の内命を奉じ京師に至り、八朔御馬進献の式を拝観し、細に其の図を画きて上る。其の往来行々山水の勝を探り、深く感ぜる所あり。これより専ら山水を画くの志を起せりとぞ、三世広重の話。」(飯島虚心著、玉林晴朗校訂『浮世絵師歌川列伝』1941年)を根拠としている。この記事は、明治27年の『小日本』108号に載る、三世広重の話(八朔御馬進献随行のことは記載されていないが、その他は概ね同じ)を基にしている。その広重の旅を天保3年と考証したのは内田実(著書『広重』1932年、参照)で、それが70年余定説になっていたのである。

鈴木先生は、天保初年の旅を根拠薄弱として疑義を呈し、完成された『東海道』の画帖に付された四方滝水の序文のある「天保五とせにあたるむつき(天保5年正月)」をシリーズが完結した時のものではなく、シリーズの刊行が開始された時と解し、版元の動向と住所の表記、そして関連する作品の刊行状況から刊行年を後ろにずらした。その詳細は割愛させていただくしかないが、私も鈴木説を補強する記事を『浮世絵細見』(講談社選書メチエ、2017年)に書いた。

私が再びこれについて書こうと思ったのは、小さいが新しい資料を見出したのと、シリーズの完成した時期について、新たな見解を持つようになったからである。

新しい資料というのは、『一月並画讃集』(那珂川町馬頭広重美術館

蔵)の広重の挿絵「駒牽き」図(図1)である。図には左に鳥居が描かれているので、朝廷への進献ではなく、神社の駒牽きとすべきものであるが、『一月並画讃集』の成立が天保3年の夏から冬(詳細は割愛)であることが重要である。図1と類似の図(ただし鳥居はない)が、スケッチ帖『鉄炮洲灯籠略図』(太田記念美術館蔵、5冊)のうちの嘉永元年(1848年)の箇所「八月駒迎ひ」として載る(図2)。また、八朔御馬進献の一行が東海道を上る行列図は、保永堂版『東海道』の「藤川」(図3、個人蔵)、狂歌入『東海道』(天保後期)の「池鯉鮒」、『五十三次名所図会』の「吉田」(安政2年[1855])に描かれていることが知られており、「吉田」には三つ葉葵と思しき紋も付されている。八朔御馬進献の行列は、肉筆画「御馬献上行列図」(絹本着色、東京国立博物館蔵、弘化[1844-48]頃)にもあり、「応需 広重謹画」と署名されている。それには「御進駒」と読める札も描かれているのである。いぶかしいのは、錦絵の3図に描かれた2頭の献上馬の背には皆、御幣が置かれているのに対し、肉筆画にはそれがない。だから、どちらかが(あるいはどちらも)広重により改変されていると考えられる。太田記念美術館蔵のスケッチ帖の図は、広重が、8月の朝廷行事の駒迎え(駒牽き)を鳥帽子水干姿の男が御幣を立てた馬を牽く姿、すなわち『一月並画讃集』の挿絵のような姿と認識していたことを物語るのかもしれない。『一月並画讃集』の図は広重が、天保3

年以前に、八朔御馬進献の行列に参加した、あるいは駒牽きのありさま(朝廷か神社)を見聞した可能性を示しているものかもしれない。

新たな見解というのは、保永堂版『東海道』の刊行開始の時期と完結の時期についてである。詳細は省くが、保永堂版『東海道』の刊行が、天保3年から天保7年前半であることは動かない。鈴木先生が、刊行開始を天保5年正月としたのは、四方滝水の序文をシリーズの刊行開始時と解したためであるが、刊行が開始される時に早々と完結された時に付けるようなものを制作したとは考えにくいと思う。前例もない。完結が天保6年後半以降であることは同意でき、完結する大分前に序文を制作したことは確かである。しかし、完結する見通しが立つ前にあのようなものを制作するのは不自然と思う。つまり、天保4年中に何点か刊行し、その売れ行きを確かめ、成功を確信した版元竹内孫八が四方滝水に依頼したと考えることはできないであろうか。完結の時期については、55図に認められる広重の署名にほとんど揺らぎがないのが気になるのである。詳細は省かざるを得ないが、広重は、天保6年春から夏頃、署名の形式を変え始める。「重」の字を行書体にし始める。ということは、広重は保永堂版『東海道』の版下絵の制作を天保6年前半には終えていたが、竹内孫八の事情で完結が遅れたと考えてもいいと思うようになったのである。もちろん、確とした裏付けはない。



図1



図2



図3

季刊 美のたより No.225

令和5年12月26日

発行 大和文華館